
エミール・ジャック＝ダルクローズの リトミックに関する一考察

—リズム運動と人間教育の関係性に着目して—

杉山 真佑美

1. はじめに

エミール・ジャック＝ダルクローズ(Émile Jaques-Dalcroze, 1865-1950)は、ウィーンに生まれ、スイスに育った音楽教育家であり、リトミック (Rhythmik) の創始者として知られる。音楽が身体の動きに基づくことを発見したダルクローズは、人間誰もが持つて生まれた身体のリズム (Rhythmus) を意識させる教育法を生み出し、音楽リズムの欠如の改善を目指した。リズム体操 (rhythmische Gymnastik) とも呼ばれるその特異な教育法は、20世紀初頭にダルクローズが考案するやいなや、瞬く間に世界に広まった。現代においてもなお、日本を含む各国の様々な教育機関で実践され続けており、その影響力は大きい。

ダルクローズの教育思想は、世紀転換期におけるドイツで興隆した新教育運動の一つである芸術教育運動の考えと一致する。教育改革志向が高まるドイツにおいて芸術教育は、創造的人間の形成を可能にすると考えられ重要視されるようになり、とりわけ音楽と体操を融合した踊りに注目が集まった。そのような中で、ダルクローズは音楽の根源であるリズムが近代人には欠けていることを発見し、リズムに着目して身体を用いた音楽教育を実践したという点で最先端を行く存在であったといえる。本論文は、リズム運動の第一人者ともいえるダルクローズの教育思想から〈リズム〉に焦点をあて、音楽教育におけるリズムを通した動きと人間教育との関係性について考察することを目的とする。なぜ世紀転換期のドイツにおいて、〈リズム〉が重要視される必要にあったのかという点について、ドイツでダルクローズのリトミック教育が始まった契機をまずは明らかにし、さらに当時の時代思潮を理解する手がかりとして新教育運動やニーチェが作品の中で

用いた舞踏表象を取り上げ、最終的にはダルクローズのリトミック教育がもたらした人間教育への影響を検証したい。

2. ヘレラウとリトミック

ダルクローズは、1865年にオーストリアのウィーンに生まれた。父は時計商社の代表人、母はペスタロッチ主義の音楽教師という知識階級の家で育ち、ピアノのレッスンを始めて受けたのは6歳の頃であった。ヨハン・シュトラウス指揮のコンサートをよく聴きに行き、7歳のときにはピアノ行進曲を作曲した。スイスのジュネーヴに移ったのは1875年の小学生の頃のことで、高校卒業までそこで育った。ダルクローズがドイツでの教育活動を開始したのは1911年のことで、ドレスデン近郊のヘレラウ (Hellerau) にジャック＝ダルクローズ学院 (Bildungsanstalt für Musik und Rhythmus E. Jaques-Dalcroze) が創設され、ダルクローズはそこで第一次世界大戦が勃発する1914年まで、ドイツにおけるリトミック教育の普及に貢献した。それまでのダルクローズは、ジュネーヴ音楽学校で教鞭を執っており、ドイツでの活動の開始はヴォルフ・ドールン (Wolf Dohrn, 1878-1914) からの誘いがきっかけであった。

当時、ヘレラウでは、ドレスデン工芸工場の社長であったカール・シュミット (Karl Schmidt, 1873-1948) が中心となって、田園都市をつくる計画が持ち上がり、1909年に家具工場と労働者のための住宅建設が始まった。産業革命による住環境の悪化を改善し、人間性を回復し、健康で公正な社会生活を構築しようとしたヘレラウでの田園都市運動は、ドイツにおける生活改革運動の初期の一例となった¹⁾。副島によれば、ヘレラウの田園都市建設における責務として3つのことが挙げられるという。つまり、「工場を建設して安定した労働の場を提供すること、良質の住宅を労働者に提供すること、そして田園都市構想に賛同する工場労働者以外の多様な住民を勧誘し、文化的・社会的に自立した共同体を作り上げること」²⁾である。そこでヘレラウでは、労働者や市民層を対象とした住居のほか、ドイツ工芸工房 (Deutsche Werkstätten) とダルクローズのリトミック施設としての

1) 副島 (2002) を参照。

2) 副島 (2002: 160).

祝祭劇場 (Festspielhaus) ³⁾ が建設され、階級・国民・人種の差別のない世界が目指された。カール・シュミットの工芸工房の管理・運営を任されていたヴォルフ・ドールンは、そのような中、ヘレラウ建設におけるマネージャー的役割を担った ⁴⁾。

1909年にダルクロワズがジュネーヴ音楽学校の生徒を連れて、オーストリアやドイツの都市を巡業しリトミックの実演講演を行っていた頃、ドールンはドレスデンで開催されたリトミックの講習会に参加した。その際にダルクロワズの教育法を初めて目にしたドールンは、最初は「完全に疑いをもって聴いていた」 ⁵⁾ という。しかし、実際にその練習を体験してみると、全く違った感覚に陥ったという。

私はあらゆる生命の源を身近に感じた。私は、私たちの習慣の中で緩慢になってしまっている有機体、身体、そして精神を、ある特定の側面から復活させ、若返らせることができると知った ⁶⁾。

ドールンは自らも称しているように、音楽の専門家ではない。「自分はただのディレタントでしかない」 ⁷⁾ というドールンは、ダルクロワズのリズム体操を実際に体験し、日常生活の中で忘れ去られていた生命力の再生を感じ取ることができたとして評価する。音楽家のための専門性を高めるための教育というよりは、一般の人々も自分自身の身体を使って人間の源泉である生命力の回復を体感することができると考えられたリトミックは、これまでの音楽教育とは大きく異なる。ドールンが言うように、ジャック＝ダルクロワズ学院での教育は、「教育、人格形成、芸術、生活の中でリズムを再び取り戻すこと」 ⁸⁾ に役立てられ、その教育法は「元

3) 祝祭劇場は、ハインリヒ・テッセノウ (Heinrich Tessenow, 1876-1950) によって設計された。年に一回開催される祝祭週間は、多くの著名人がヘレラウを訪れるきっかけとなり、国際的な注目を浴びるものとなった。

4) 田園都市ヘレラウの建設にあたり、中心的役割を担った人物として、3名を挙げることが出来る。本文中でも紹介したカール・シュミット、ヴォルフ・ドールンのほか、リヒャルト・リーマーシュミット (Richard Riemerschmidt, 1868-1957) はヘレラウ全体の空間構成のデザインを担当した。

5) Dohrn (1992: 45).

6) Dohrn (1992: 45).

7) Dohrn (1992: 45).

8) Dohrn (1992: 44).

来のまったく比類ない体験」⁹⁾として理解される。ドーレンは、この実演講演に参加して初めてリズム体操を体験し、その新しい教育法に魅了され、ダルクローズをドイツのヘレラウに招聘することを決意する。そこで目指された人格形成とダルクローズの教育思想との一致は、ヘレラウでリトミック教育が普及した大きな要因となり、ダルクローズがドイツでリトミックの指導をした最終年の1914年には14か国から500人もの生徒がヘレラウに学びに来るほどとなった¹⁰⁾。

3. 世紀転換期におけるリズム運動推進の背景

3.1. 芸術教育運動における「音楽と体操 (Musik und Gymnastik)」

世紀転換期のドイツにおいて、ダルクローズのリズム教育に対して高い関心が寄せられ、急速な普及が進められたことは偶然ではない。ダルクローズがリトミック教育を考案したちょうどその頃、19世紀末から20世紀初頭にかけてドイツでは、ヘルバルト主義による旧来の学校教育や産業化・合理化の進展による技術偏重主義への批判から、新教育運動 (reformpädagogische Bewegung) が興隆し、人間の本質の問い直しを求める動きが強まっていた。教育改革を主眼とするその運動は、青年運動、芸術教育運動、労作学校運動、田園教育舎運動など多岐にわたり、これまでの主知主義から離反し、創造的な人間形成を目指した。特に、芸術教育運動 (Kunsterziehungsbewegung) は古き教育に対して新たな創造的人格を形成するためには芸術がその最も強力な源泉であるという考えのもと、学校教育における芸術教育の改変を試みた。そのような時代思潮の中、芸術教育の一貫として、音楽と体操を結びつけた舞踏教育が重要視される傾向にあったのである。

ドイツ新教育運動に関する研究史の中で古典的位置を占めるヘルマン・ノール (Herman Nohl, 1879-1960) は、『ドイツにおける新教育運動とその理論 („Die pädagogische Bewegung in Deutschland und ihre Theorie“)』の中で、文化批判に始まる芸術教育運動の動向を次のように位置づける。

文化批判は、70年代 (1870年代、筆者) にはじまり、空虚になった文明やあらゆる分析対象となる主知主義に対して、人間の生産的諸力から形成される新しい

9) Dohrn (1992: 45).

10) Vgl. Bünner / Leiser (1900: 153).

教養を必要としたが、ここはその最も強力な源泉だった。(…) このようにして、芸術それ自体の中に、従来の教養及び文化に対する闘争が、まず芸術家の独自の存在のために、そしてそれからドイツ人とその人間性のために生じた。つまり、主知主義からの離反である。それは、自然のままのものとしてみなされる感性や身体との新しい関係、表現への新たな意志と社会形態との関係である。つまり、特に業績が問われる時代の功利主義に対して、身分と社会的業績には依存しない、形作られた人格それ自体の価値という認識である¹¹⁾。

業績や利益を求める功利主義、感情よりも理性や知性を主とする主知主義は文明を空疎化させたとして、文化および教養批判は、そのことから離反し、新たな教養として感性や身体を重視した芸術教育の必要性を説いた。人類にとって本来の自然の姿に戻ることが必要であるという考え方が強まった時代思潮の中で、芸術教育はその最も強力な源泉にあるとされ、そこから人格形成の価値を見出すことができるようになったのである。こうした考えに、芸術教育運動推進の契機を見取ることができる。

芸術教育を推進するこの運動の一貫として、それに賛同する人々によって、20世紀初頭に3回にわたる芸術教育会議（Kunsterziehungstag）が開催された。第一回は、1901年にドレスデンにて「造形芸術（bildende Kunst）」を、第二回は1903年にヴァイマルにて「言語と詩（Sprache und Dichtung）」を、第三回は1905年にハンブルクにて「音楽と体操（Musik und Gymnastik）」をテーマとしていた。この節では特に、第三回目の「音楽と体操（Musik und Gymnastik）」における議論を取り上げる。芸術教育運動の指導者であり、ハンブルク美術館館長を務めたアルフレッド・リヒトヴァルク（Alfred Lichtwark, 1852-1914）は、会議の講演で音楽と体操の意義について、次のように述べている。

この会議において決定的な意味を持ったのは、音楽と体操は教育にとって最も根本的な意味において一体であるということについて、全員一致の確信が得られたことである。これまで、音楽と体操は通常、時間割の中で別々に指導されており、せいぜい兼任のような形で教師が担当していたくらいであった。この2分野の代

11) Nohl (1988: 38-39).

表者らは、以下のことを強く強調した。つまり、音楽と体操は、歌あるいは音楽を伴う踊り・輪舞のリズム運動において、共通の根拠を持っていること、そしてまたこの古くからの結びつきは、教育にとって非常に重要な意義を持っているが、これまで実際のところ世間一般には評価されていなかったことである。(…)身体訓練の美的作用は、本質的に音楽と結びついている¹²⁾。

これは、第三回目の芸術教育会議が開催された翌年に出版された会議報告書の一箇所である。ここで注目すべきは、音楽と体操にはリズム運動という共通項があるにもかかわらず、これまでの教育では別々に指導されていたということである。古代から音楽と体操はリズム運動を伴う踊りとして結び付けられていたが、それが世間一般の評価につながらず、そういった教育が施されなかったことは、後に述べるように人間の脱リズム化と結びつく。

音楽と体操の根底に〈リズム〉という共通点があることに注目が向けられたことは、ダルクローズがリズム運動を通して音楽と身体を融合しようとしたことと通ずる。その後、この第三回芸術教育会議を契機として、新体操促進運動 (Gymnastikbewegung) が発足し、1922年には芸術体操会議 (Tagung für künstlerische Körperschulung) が開催された。この芸術体操会議では、その当時、ドイツの体操・舞踏を牽引していたイサドラ・ダンカン (Isadora Duncan, 1877-1927) やルドルフ・フォン・ラバン (Rudolf von Laban, 1879-1958) らが実践している授業方法が提示され、ダルクローズの教育についても言及されていた。そのことは、その翌年に出版された会議報告書『芸術的な身体訓練 („künstlerische Körperschulung“)』から確認できる¹³⁾。

ダルクローズがリトミックを考案した世紀転換期のドイツでは、こうした芸術や体操に関する教育運動が繰り返されるわけだが、そこでは身体の動きを伴った芸術教育が志向され、その中でも特に舞踏による身体表現には大きな注目が集まった。ドイツに「表現舞踊」と後に呼ばれることになる新しい踊りの概念をもたらした、ドイツ人のリズムの発見に大きな貢献をもたらしたダンカンは、1903年

12) Lichtwark (1906: 26-28).

13) Vgl. Freund (1923: 28-36). 「リズム体操と身体教育 (Rhythmische Gymnastik und Körpererziehung)」というテーマでエルンスト・フェランド＝フロイント (Ernst Ferand=Freund) によって発表された。

にアメリカからドイツにやって来て以来、モダンダンスを普及させた¹⁴⁾。その後も、表現舞踏を提唱したラバンや、ダルクローズの教え子であり、その指導法を批判しながらもリズム体操の理論を確立し発展させたルドルフ・ボーデ (Rudolf Bode, 1881-1970) らの登場によって、芸術と身体運動の融合性が確固たるものとなり、ドイツ芸術教育に新たなアプローチをもたらした。

3.2. カール・ビューヒャーのリズム論

ダルクローズをはじめとする、20世紀初頭にドイツに舞踏を広めたダンカンやラバンらが展開する教育理念とその方法はそれぞれ独自のものではあるが、その根底にはいつも〈リズム〉がある。この頃にドイツで刊行されたリズムに関する著作は3冊あり、これらはダルクローズがリズム運動を提唱する以前に出版されている。エルンスト・モイマンの『心理学とリズムの美学に関する研究 („Untersuchungen zur Psychologie und Ästhetik des Rhythmus“)』は1894年に出版され、それに続いて、カール・ビューヒャーの『労働とリズム („Arbeit und Rhythmus“)』(1896年)、クリスティアン・キルヒホフの『古代ギリシャ人の戯曲的舞踏法 („Dramatische Orchestik der Hellenen“)』(1898年)が公刊された。それまでは、文献学の観点からしかリズムの問題について語られてこなかったが、ここで挙げられた3冊は初めて、生きている人間の現象としてリズムを捉え、リズム研究の歴史的根源に新たな活気をもたらしたという¹⁵⁾。

上記の中でも、ダルクローズをドイツに招いたドールンは、経済学者カール・ビューヒャーが著した『労働とリズム』に注目し、「リズムは人間の有機的本質から生じる」¹⁶⁾というビューヒャーの考えに影響を受けた。ビューヒャーによれば、人類の原始的段階では、あらゆる労働がリズムを持っており、「労働・遊戯・芸術を融合させるような人間の活動は一つしかない」¹⁷⁾とされ、「リズムは快感を呼び起こす」¹⁸⁾ものだった。かつて人間は、音楽や舞踏、詩を通してリズムを身に付けたのではなく、本質的にリズムを持っていたというビューヒャーの証言は、

14) Vgl. Günther (1900: 16).

15) Vgl. Günther (1900: 16).

16) Bücher (1919: 454).

17) Bücher (1919: 453).

18) Bücher (1919: 454).

手工業が機械工業に取って代わる社会の中で、人間の〈自然な〉姿に立ち還ろうとした世紀転換期の教育思潮に大きな影響をもたらしたといえる。ドールンは、労働と日常生活の中で人類がかつては所有していたリズムを喪失した近代の現状を危惧した。そして、「我々は脱リズム化されている」¹⁹⁾ことが、ダルクローズのいう近代人の病「アリユトミー (Arhythmic)」²⁰⁾を招いたとする。アリユトミーというのはそもそも不整脈などの医学用語として用いられていたが、ダルクローズはそれをリズムの欠陥状態を示す言葉として用い、リズムを喪失した近代人の状態を表した²¹⁾。

3.3. ニーチェにみる舞踏表象

世紀転換期のドイツでは、先にも述べたが、ダルクローズやダンカン、ラバンなどといった舞踏家・体操家が現れ、実践的な舞踏教育に関心が高まったが、文学テキストにおいても舞踏をテーマにした作品が目立つようになった²²⁾。この傾向に先鞭をつけたのがニーチェの思想である。ニーチェ (Friedrich Nietzsche, 1844-1900) の『ツァラトゥストラはこう語った („Also sprach Zarathustra“)] (以下、『ツァラトゥストラ』) では、〈踊り (Tanz)〉という言葉が多く用いられ、ここに登場するツァラトゥストラは語り手かつ踊り手として登場する。山口庸子によれば、「ニーチェにとって、『精神』とは、表面に見える『身体』から遡って背後に仮構され、また仮構されざるを得ないなにか」²³⁾であり、身体と精神は対立し得ないものであるという。つまり、身体はただの物質的役割を果たしているのではなく、身体を使った踊りには、常に精神が伴っているというのだ。

まず、〈遊戯 (Spiel)〉を表すツァラトゥストラの舞踏から、精神を伴った身体観が最も表れている箇所を以下に挙げる。

わが兄弟よ、君たちの胸を高く張れ、高く！もっと高く！そして、脚のことも、忘れるな！脚をも高く挙げるのだ、君ら優れた舞踏者たちよ。いっそのこと、逆

19) Dohrn (1992: 47).

20) Dohrn (1992: 47).

21) 山名 (2006: 84) を参照。

22) 山口 (2006) を参照。山口は、ニーチェのほか、リルケ、ホフマンスタールらの著作を用いて文学と舞踏という関係について言及している。

23) 山口 (2006: 76).

立ちするのだ！²⁴⁾

ツァラトゥストラの〈遊戯 Spiel〉の舞踏は、「出現と消失、遠さと近さ、表面と深み、あるいは上下の絶えざる交代によって表現され」²⁵⁾、ここでは「逆立ち」の舞踏がそれを象徴すると山口は述べる。逆立ちというのは、「重力の否定であり、かつ頭、つまり知性が下位に置かれること」²⁶⁾が意味される。常に仮象と共存する日常の現実世界に対して、「逆立ち」という遊戯の舞踏を表象することで、その現実を逆さまから見る事が出来る。山口の言葉を借りれば、「秩序によって『真実の世界』と『見かけの世界』に分離された世界」²⁷⁾に遊戯としての舞踏は戦いを挑むことで、その遊戯は「捏造された『諸対立』を次々と反転」²⁸⁾させてさまざまな段階に分解するという。

さらに続けて、「もうひとつの舞踏の歌」の章では、次のような場面に舞踏が登場する。

舞踏の好きなわたしの足に、お前はちらと視線を投げた。笑いかけ、問いかけ、うっとりさせる揺れる視線を。

たった二度、お前は可愛い手でお前のカスタネットを打ち鳴らした。一するともう、わたしの足は舞踏の熱に揺れ出した。一

わたしの踵は浮かれ立ち、つま先は耳そばだてて、お前の拍子に乗ろうとした。全く踊り手というものは、その耳を一つま先に具えている²⁹⁾。

ここでは、「足」、「踵」「つま先」といった踊る足に纏わる言葉が登場する。山口によれば「〈さかさまの世界〉のシンボル」³⁰⁾である「足」は、例えば、「耳をつま先に具えている」という表現にみられるように、先に述べた「逆立ち」の遊戯と同じ舞踏による反転を意味する。さらには、「カスタネット」は、踊りのリズム

24) Nietzsche (1980: 366). 藪田訳 (1982: 434).

25) 山口 (2006: 65).

26) 藪田 (1982: 519) 訳注から引用。

27) 山口 (2006: 65).

28) 山口 (2006: 65).

29) Nietzsche (1980: 282). 藪田訳 (1982: 334).

30) 山口 (2006: 86).

ムを表す際に用いられる道具である。カスタネットが打ち鳴らす音は、「秩序を骨抜きにしていく遊戯のリズム」³¹⁾を意味すると山口は指摘している。

「ただ舞踏でのみ、わたしは最高の事物の比喩を語りうる」³²⁾というニーチェの言葉があるように、舞踏による身体表象はことばを超えた事象を表する一媒体として認識され、『ツァラトゥストラ』の中の舞踏は、「逆立ち」の遊戯が示すように、通常の言語による認識秩序を覆すための表象として用いられたのだといえる。

ニーチェは、同時代に対して文化批判・教養批判の立場をとったことは周知のとおりである。先に述べた芸術教育運動も、一般に、ニーチェの文化批判に端を発するとされる。その批判は『反時代的考察』をはじめ、彼自身の著書の中で表されており、本節で取り上げた『ツァラトゥストラ』でも、「わたしの子供たちによって、わたしは償いをしたいのだ。わたしが、わたしの父祖の子供であることの。そしてすべての未来によって—この現代の償いをしたいのだ」³³⁾という台詞をツァラトゥストラに言わせている。ニーチェは自身が生きた時代の教育に対して、我々は「償い」をしなければならないとする。そのような彼の志向は、世紀転換期に学校教育改革という形で現れ、そのなかで特に芸術教育の重要性の認識へと繋がっていったのである。

4. ダルクローズの〈リズム〉

ニーチェの身体哲学は身体と精神の切り離しを否定し、ことばを媒体とする文学の中で舞踏表象を用いて、舞踏のみが言語を超えた事物表象を可能にするという認識を一般化した。このような認識が流布していく世紀転換期において、ダルクローズは精神と身体の融合を音楽と身体運動を合わせたリトミックによって解決することを試みた。ダルクローズの教育法は、基礎教育としてのリトミック、聴取能力育成のソルフエージュ、瞬時の創造能力育成のための即興演奏という3つメソッドから成る。ここでは、ダルクローズの論文集『リズム・音楽・教育』から彼のリズム論を読み取る。

31) 山口 (2006: 90).

32) Nietzsche (1980: 144). 藪田訳 (1982: 166).

33) Nietzsche (1980: 155). 藪田訳 (1982: 180).

ダルクローズがリトミックを考案したのは、1892年に母校のジュネーヴ音楽学校にハーモニーとソルフェージュの教授として就任してからのことである。その時のことを彼は次のように述べている。

最初の授業で気づいたのは、将来和声学を身につけようとする者が音を書き取る課題で和声を聴き取れない、ということだった。(…)音楽における運動神経のおよび力動的な性質のものはすべて聴覚だけでなく、当初は触覚と思っていたが、他の感覚にも関わるという結論にいたった。というのも指によるメトリックの練習は、生徒の進歩を充分促していたからである。足を踏み鳴らすこと、胴体や頭部の振動、全体的な身震い等、ピアノ演奏の間に手以外の身体部分で私が気づいた多様な反応からしても、音楽的な感覚は、それがリズム的な性質であるかぎり、身体的全器官の筋肉と神経の働きから生じるという考えにまもなくいたったのである。したがって私は生徒たちに歩いたり、止まったりする練習をさせ、身体で音楽リズムを聴取し反応することに慣れさせることにした。これが「リトミック」の始まりである³⁴⁾。

学生たちは指の機械的な反復練習を基本とする従来の音楽教育に従っていたにもかかわらず、聴取能力が欠けていることに気が付いたダルクローズは、聴覚と運動能力との結びつきに着目した。足を踏み鳴らすこと、体を動かすこと、といった日常生活の動きから音楽的感覚であるリズム感を得ることが出来るという発見は、「リトミック」という形式を作り、身体運動から音楽リズムを養う新しい教育法を生み出した。ドールンは、この新たなリズム教育の発見に対して、発見ではなく「再発見 (Wiederentdeckung)」³⁵⁾であると表している。人間は本来誰もがリズムを持っていたが、社会の生活変動によりそのメカニズムが狂ってしまった。ダルクローズは、それを運動によって再起させ、さらに音楽のリズム感育成に役立てることができると考えた。ドールンは、このダルクローズのリトミックをただの音楽教育の一貫としてではなく、「人間の人格的成長」³⁶⁾の側面にも応用でき

34) Dalcroze (1921: X-XI).

35) Dohrn (1992: 47).

36) Dohrn (1992: 44).

ると評する。

ダルクローズは、「前世期の教育法は、子どもたちが現代の芸術家の手法を理解し、習得できるようにする教育法ではないことは明白である」³⁷⁾と述べ、学校教育が「あまりにも芸術性に欠けている」³⁸⁾ことに危惧の念を抱いていた。それに対するダルクローズの教育では、芸術的感性は、リズム運動がもたらす「神経系の教育」によって磨かれるとし、そのためには「リズムのためのリズムによる教育」³⁹⁾が最も有効な方法であるとした。「リズムはあらゆる芸術の基礎」⁴⁰⁾にあるとするダルクローズは、子ども達に音楽を感じさせて、聴取能力を伸ばすだけでなく、身体を動かすということに教育の重点を置いたのである。

ダルクローズはリズム運動を通して、身体のリズム感覚と聴取感覚を目覚めさせることを目指したが、リトミックを指導する際に、頭で理解するだけでなく、それを実感して感じるころまでが教育の目的であるとする。

リトミック教育の目的は学習を終えたときに生徒に「わかっている」と言わせるのではなく「体に感じる」と言わせることを目指している。そうすれば彼らに表現したいという欲求を抱かせることになる⁴¹⁾。

無意識に眠っている身体の神経を呼び覚ますことを目的としたダルクローズのリトミックは、この論文に挙げられているだけで全22項目ある⁴²⁾。例えば、一番初めの「筋肉弛緩と呼吸 (Muskelentspannung und Atmung)」練習では、次のように説明される。

生徒はまず、それぞれの手足の筋肉活動を最小限に抑えることを学ぶ。そして、筋肉を徐々に強めて刺激を与える。仰向けに寝て、生徒は身体全体を弛緩させ、あらゆる格好で呼吸にだけ注意力を払う。それから、それぞれの手足の一箇所を緊張させる。そのあと、手足の2箇所あるいは数カ所を同時に緊張させたり、一

37) Dalcroze (1921: 6).

38) Dalcroze (1921: 64).

39) Dalcroze (1921: 208).

40) Dalcroze (1921: 52).

41) Dalcroze (1921: 75).

42) Vgl. Dalcroze (1921: 77-83).

箇所緊張をもう一箇所の弛緩と対比させる。この弛緩練習はあらゆる方法の基礎となる。その練習は、子どもにとって遊びの形式で、筋肉の抵抗を明確にしたり、適当でない力を徐々に緩めることができる。呼吸練習は、神経支配の練習とともに実行され、あらゆる姿勢で行われる⁴³⁾。

手足の筋肉を意識させることを目的としたこの練習は、あらゆる側面から神経を集中させることに努めている。決して単調な運動ではなく、不要な動きを取り除き、自然な動きが理想とされる。また、呼吸はその時間を規則的に分割して、拍子として表現される⁴⁴⁾。そのような呼吸筋肉に伴ったリズムを用いて、さまざまな姿勢で試しながら手足を動かすことで、筋肉の神経を呼び起こし、意識化することを可能にさせるのである。

5. 結び

本論文では、〈リズム〉を主題として、それが世紀転換期ドイツにおける芸術教育の分野で必要とされた契機とその理由について述べた。最後に、ダルクローズのリトミックと結びつけてその教育の効果について考察したい。

ダルクローズは学校改革志向の中、〈知〉に重点が置かれたこれまでの教育に対して、〈動〉の重要性を強調した。このことは、ビューヒャーやリヒトヴァルクが指摘したように、人間が古代から身体の中に本質的に持っていた〈リズム〉の再起を可能にしたといえる。また、同時期に舞踏や体操の必要性が問われ、多くの舞踏家・体操家が輩出されたことはすでに述べたが、ダルクローズは中でも、体操によるリズム運動ではなく、音楽を主としたリズム教育を施したことも特徴的である。ダルクローズのリトミックは、そもそも生徒の聴取能力を発達させるための試みであった。身体のあらゆる神経系を呼び覚まし、音楽リズムを身体で聴取し反応するといった教育は、聴取能力の育成だけでなく、音楽的感覚の育成にも役立った。従来 of 主知主義による教育や工業化の発展は、人間の創造力や感性を奪うことになる、と当時の人々は考えていた。それに対して、新教育運動は科学技術が発達する以前の本来の人間の原点へと立ち還ることをモットー

43) Dalcroze (1921: 77).

44) Vgl. Dalcroze (1921: 50).

としていた。ダルクローズが考案したリズム教育は、そのような時代思潮の中、人間の失われた〈リズム〉を取り戻し、精神と身体が融合した新たな人間教育を生み出した。ダルクローズはリズムの発見者として、こうした新教育に対して大きな功績を残したといえる。

参考文献

一次文献

- Bücher, Karl (1919): *Arbeit und Rhythmus*. Leipzig: Emmanuel Reinicke. [ビューヒャー、カール (1944) 『労働とリズム』(高山洋吉訳) 第一出版。]
- Dohrn, Wolf (1992): Die Aufgabe der Bildungsanstalt Jaques-Dalcroze. In : Karl Lorenz u. Hans-Jürgen Sarfert (Hrsg.): *Die Gartenstadt Hellerau und weitere Schriften*. Dresden: Hellerau-Verlag, S. 43-60.
- Ferand=Freund, Ernst (1923): Rhythmische Gymnastik und Körpererziehung. In: Ludwig Pallat u. Franz Hilker (Hrsg.): *Künstlerische Körperschulung*. Breslau: Ferdinand Hirt, S. 28-36.
- Jaques=Dalcroze, Emile (1921): *Rhythmus, Musik und Erziehung*. Basel: Benno Schwabe. [ジャック＝ダルクローズ、エミール (2003) 『リズム・音楽・教育』(河口眞朱美訳) 開成出版。]
- Lichtwark, Alfred (1906): Einleitender Vortrag. Musik und Gymnastik. In: *Kunsterziehung. Ergebnisse und Anregungen des dritten Kunsterziehungstages in Hamburg, am 13., 14., 15. Oktober 1905. Musik und Gymnastik*. Leipzig: R. Voigtländer.
- Nietzsche, Friedrich (1980): Also sprach Zarathustra. In: Giorgio Colli u. Mazzino Montinari (Hrsg.): *Sämtliche Werke. Kritische Studienausgabe in 15 Bänden*. Bd. 4. München. Berlin u. New York: Deutscher Taschenbuch-Verlag. [ニーチェ、フリードリヒ (1982) 『ニーチェ全集 第一巻 (第II期)』(藺田宗人訳) 白水社。]
- Nohl, Herman (1988): *Die pädagogische Bewegung in Deutschland und ihre Theorie*. Frankfurt am Main: Vittorio Klostermann. [ノール、ヘルマン (1987) 『ドイツ新教育運動』(平野正久他訳) 明治図書。]

二次文献

- 長谷川章 (2000) 『世紀末の都市と身体 芸術と空間あるいはユートピアの彼方へ』ブリュッケ。
- 副島美由紀 (2002) 「モダニズムが夢見たユートピア：ドイツ田園都市建設の歴史 (4) ヘレラウの誕生」小樽商科大学『小樽商科大学人文研究』第 103 号、153~173 頁。
- 副島美由紀 (2003) 「モダニズムが夢見たユートピア：ドイツ田園都市建設の歴史 (5) ヘレラウの頂点：祝祭週間」小樽商科大学『小樽商科大学人文研究』第 105 号、123~155 頁。
- 副島美由紀 (2003) 「モダニズムが夢見たユートピア：ドイツ田園都市建設の歴史 (6) 理想郷ヘレラウの終焉」小樽商科大学『小樽商科大学人文研究』第 106 号、108~111 頁。
- マルタン、フランク／デヌス、チボル他 (1977) 『作曲家・リトミック創設者 エミール・ジャック＝ダルクローズ』(板野平訳) 全音楽譜。
- 山口庸子 (2006) 『踊る身体の詩学』名古屋大学出版会。
- 山名淳 (2006) 『夢幻のドイツ田園都市 教育共同体ヘレラウの挑戦』ミネルヴァ書房。
- Bünner, Gertrud / Leiser, Holmrike (1990): Rhythmik – Rhythmisch-musikalische Erziehung. In: Eva Bannmüller u. Peter Röthig (Hrsg.): *Grundlagen und Perspektiven ästhetischer und rhythmischer Bewegungserziehung*. Stuttgart: Ernst Klett Verlag für Wissen und Bildung, S. 153-182.
- Günther, Helmut (1990): Geschichtlicher Abriß der deutschen Rhythmusbewegung. In: Eva Bannmüller u. Peter Röthig (Hrsg.): *Grundlagen und Perspektiven ästhetischer und rhythmischer Bewegungserziehung*. Stuttgart: Ernst Klett Verlag für Wissen und Bildung, S. 13-50.
- Tervooren, Helga (1987): *Die rhythmisch-musikalische Erziehung im ersten Drittel unseres Jahrhunderts. Von der Jahrhundertwende bis zum Ausgang der Kestenberg-Reform unter besonderer Berücksichtigung von Kindergarten und Grundschule*. Frankfurt am Main, Bern, New York u. Paris: Peter Lang.

Die Rhythmik von Emile Jaques-Dalcroze

Über die Beziehung zwischen der rhythmischen Bewegung und der Bildung der Menschen

Mayumi Sugiyama

Emile Jaques-Dalcroze (1865-1950) ist ein Schweizer Musikpädagoge und der Begründer der „Rhythmik“, die eine rhythmisch-musikalischen Erziehung ist. Sein großes Verdienst liegt in der Entdeckung des Rhythmus und in seiner Verbindung der rhythmischen Bewegung mit der musikalischen Erziehung. Im Jahr 1911 wird die „Bildungsanstalt für Musik und Rhythmus E. Jaques Dalcroze“ in Hellerau bei Dresden gegründet, und er ist dort bis 1914, dem Jahr des Ausbruchs des Ersten Weltkriegs, als Lehrer für Rhythmik tätig. Wolf Dohrn (1878-1914), der großes Interesse für Dalcrozés Methode hat und ihn nach Deutschland einlädt, um in dieser Bildungsanstalt Hellerau Unterricht in Rhythmik zu geben, schreibt in seiner Schrift *Die Aufgabe der Bildungsanstalt Jaques-Dalcroze*: „Unsere Anstalt unterscheidet sich von den meisten Lehr- und Bildungsanstalten dadurch, daß sie einem ganz bestimmten Gedanken dient: der Wiedergewinnung des Rhythmus in der Erziehung, in der Bildung der Persönlichkeit, in der Kunst und im Leben.“ (Dohrn 1911:44) Seine Zeit sieht er als entrhythmisiert an. Durch die reformpädagogische Bewegung wird die Kunsterziehung zur Bildung der Menschen gefördert, die gegen die bisherige Bildung und Kultur kämpft. Diese Arbeit stellt sich die Aufgabe, die Beziehung zwischen der rhythmischen Bewegung und der Bildung der Menschen in den Mittelpunkt zu stellen. Dafür ist Dalcrozés Rhythmik ein Beispiel, welches ich hier untersuche.

Zuerst stelle ich die Kunsterziehungsbewegung vor, die ein Teil der reformpädagogischen Bewegung ist, die es am Ende des 19. Jahrhunderts und Anfang des 20. Jahrhunderts gab. So fand beispielsweise der dritte Kunsterziehungstag 1905 in Hamburg statt und behandelte das Thema „Musik und Gymnastik.“ Der Hauptinitiator dieses Tages, der Kunsthistoriker Alfred Lichtwark (1852-1914), führt aus, „(...) daß Musik und Gymnastik eine gemeinsame

Wurzel in den von Gesang oder von Musik begleiteten rhythmischen Bewegungen des Tanzes und des Reigens haben, und daß diese uralte Verbindung für die Erziehung von sehr hoher und bisher praktisch noch nicht allgemein gewürdigter Bedeutung sei. (...) Die ästhetische Wirkung der Leibesübungen ist wesentlich an die Verbindung mit der Musik gebunden.“ (Lichtwark 1906: 26-28) Musik und Gymnastik haben als eine gemeinsame Wurzel den Rhythmus. Diese Verbindung sei, wie er sagt, aus uralter Zeit, trotzdem praktiziere man sie aber bisher nicht.

Was theoretische Untersuchungen über den Rhythmus betrifft, so erschien 1896 die Untersuchung *Arbeit und Rhythmus* von Karl Bücher (1847-1930). Der Grundgedanke Büchers lautet: „Der Rhythmus entspringt dem organischen Wesen des Menschen.“ (Bücher 1919: 454) Es ist von entscheidender Bedeutung, dass der Mensch den Rhythmus nicht durch Musik, Tanz und Gedicht erlernt, sondern ihn ursprünglich in seinem eigenen Körper hat. Trotzdem, in der Zeit der Industrialisierung, sind die Menschen entrhythmisiert. Dalcroze nennt diese Erscheinung „Arhythmie“ und versteht darunter sogar eine Art Krankheit. Wie sehr man sich in dieser Zeit mit diesen Fragen beschäftigt, zeigt sich darin, dass der Tanz in Nietzsches Werk *Also sprach Zarathustra* eine entscheidende Rolle spielt. So heißt es dort: „Nur im Tanze weiss ich der höchsten Dinge Gleichniss zu reden.“ (Nietzsche 1980: 144) Dass Nietzsche gegenüber der Kultur und Bildung seiner Zeit sehr kritische eingestellt ist, ist allgemein bekannt.

Abschließend untersuche ich Dalcrozes Rhythmik genauer. Als er erstmals am Genfer Konservatorium unterrichtet, bemerkt er, dass seine Schüler und Schülerinnen kein sehr ausgeprägtes musikalisches Gehör haben; dabei entdeckt er, dass dasjenige, „was in der Musik motorischer oder dynamischer Natur ist, nicht allein vom Gehör abhängt, sondern noch von einem andern Sinne.“ Dazu schreibt er dann: „Ich ließ also meine Schüler Marsch- und Haltübungen machen und gewöhnte sie daran, beim Hören musikalischer Rhythmen körperlich zu reagieren. Dies war der erste Anfang der Rhythmik.“ (Dalcroze 1921: X-XI) Sein pädagogisches Ziel beschreibt er so, dass die Schüler und Schülerinnen nach der Vollendung ihrer Studienzeit nicht mehr „ich weiß“, sondern „ich empfinde“ sagen können.

Dieser Aufsatz thematisiert also den Rhythmus bei der Kunsterziehung in den

Bereichen der Musik und der Gymnastik zur Zeit der Jahrhundertwende. Den Rhythmus, der ganz ursprünglich im Körper der Menschen angelegt ist, entdeckt Dalcroze in seinen Arbeiten wieder und führt die rhythmische Bewegung in der musikalischen Erziehung ein. Seine Bemühungen verbinden sich mit der Zeitströmung der reformpädagogischen Bewegung, was zu einer günstigen Aufnahme seiner Methode führt. Insgesamt geht es Dalcroze darum, die Ursprünglichkeit der Menschen wieder zu finden, was zur Befreiung ihrer Menschlichkeit führen soll.